

【研究実践校 全体授業研究会（低学年）】

参 加 者：就將小職員 米子市1名

指導助言：森 郁夫 元校長先生

オブザーバー：長谷川誠一 県小体研顧問



○協議の柱

運動の特性を生かした学びとなっていたか。

評価も含めたふり返りの在り方は有効であったか。

○成果

- ・「投」の技能が身についていた。
- ・場の設定の工夫により、全ての子どもが活躍できた。⇒「楽しさ」に繋がっていた。
- ・2年生でもルールを守り、楽しそうに活動する姿がよかった。
- ・中間にふり返しを行うのは、効果的に感じた。

○課題

- ・本時の活動において、チームのめあては何であつたらよかったのか。
（フロア）指導案を見ると「ボールを取ったらすぐ投げよう。」 「的を挟んで投げよう。」
授業者の声かけは「周りを見よう」
⇒本時のねらいが不明瞭であるように感じた。
- ・中間評価後のチームで考えた工夫が何であるか見え難かった。
- ・ふり返りの軸の1つが「めあては達成できたか」
⇒
途中で「めあて達成」の文言に子ども達が混乱したのではないか。
（フロア）中間ではゲーム①での課題を話し合い、終末に達成にできたかシールを貼るのはどうか。
（フロア）中間では作戦を考えるワークシートがよかったのではないか。
（授業者）作戦を記入するワークシート準備していたが、タイムマネジメント的に却下した。
→ひたすらに個人で投げる活動に中間のふり返しを入れることで仲間との関わりを生じさせることをねらって設定した。
→ふり返しボードで中間を評価し、「楽しめない」子どもをいち早く察知し、「楽しめる」ようチームにフィットさせることを想定していた。
→子ども同士で「楽しめない」子にどう声かけをすればよいかがわからなかったのでは。
→ふり返しボードに楽しくない理由項目を列挙し、
話す材料にしてはどうか。
（フロア）低学年の場合、話型を準備して、理由を伝えながらシールを貼るのが効果的か。
（指導助言）「めあて」は子どもによって異なる。それを一律で考えるのは難しい。チームの「めあて」に対してふり返しボードを中間・終末の両方に使ってもよいと考える。
（フロア）ふり返し場面で話し合いが停滞しているとき、授業者が「〇〇さんは、～ができていたよね。」など様子を事前に見取り声かけ（コーディネート）をしていくことが必要。